

論 説

オーストリアにおける1934年2月蜂起と
コロマン・ヴァリッシュ

伊 藤 富 雄

目 次

- はじめに
- I. コロマン・ヴァリッシュの生涯
- II. 1934年2月蜂起
- III. ブルックでの状況とヴァリッシュの逮捕
- IV. 即決軍事裁判とヴァリッシュの処刑
- V. おわりに

は じ め に

1934年2月19日午後11時40分、オーストリアのシュタイアーマルク州の小都市レオーベンで社会民主党の指導者コロマン・ヴァリッシュが絞首刑に処せられた。「社会民主主義万歳！自由万歳！」と叫ぶ彼の首に無情にも絞首刑の縄が食い込み、彼の叫びは封殺されてしまった。その日の午後7時には連邦首相ドルフスが首都ウィーンからレオーベンの即決軍事裁判所に死刑判決を促す電話をかけてよこした。午後8時40分、死刑判決が言い渡され、3時間後にヴァリッシュは処刑された。彼の45歳の誕生日の9日前のことだった。首相ドルフスを初めとする政府関係者、資本家やファシストたちは彼の処刑にホット安堵の念を抱いた。ヴァリッシュはなぜそこまで彼らの憎悪的になったのだろうか？そもそも彼は処刑されるほどの、どのような罪を犯したというのだろうか？

ヴァリッシュは社会民主党の指導者の一人として、貧しい労働者の生活改善のため、またオーストリアの民主主義の擁護のためにひたすら活動してきただけだった。1934年2月12日、彼は勝利を信じた革命家としてシュタイアーマルク州ムール河畔ブルックの街へ赴いたのではなかった。何かの折には必ず駆けつける、という労働者との約束を守るためだけに、勝利ではなく敗北を自覚し、死を覚悟した上で、彼らの元へ赴いたのだった。

作家アンナ・ゼーガースはヴァリッシュが処刑されて10週間後に、彼が長年社会民主党の指導者として活躍したブルックへの追悼の旅を行なった。人々からヴァリッシュの思い出を聞き出し、彼の墓を詣でた。墓には警察官によってシャベルで押しつぶされた二、三本のタンポポの花が添えられていた。淡々と描写されたゼーガースの『コロマン・ヴァリッシュの最後の

道』はヴァリッシュの人柄を改めて彷彿とさせるものである¹⁾。また詩人ベルトルト・ブレヒトはヴァリッシュの働きを称える『コロマン・ヴァリッシュ・カンタータ』という長い詩を捧げ、ヴァリッシュを称えている：

君は今日は敗北し、奴隷の身ではある
しかし闘いは最後の戦闘で終わるものであり
最後の戦闘の前に終わることはない²⁾

著名な作家や詩人からそのような追悼の作品を捧げられたヴァリッシュとは一体いかなる人物だったのか？なぜ彼は絞首刑にならざるをえなかったのか？日本では彼の名前は殆ど知られていないし、オーストリアでもヴァリッシュの名誉は第二次大戦後によりやく回復され、彼に関する研究も大戦後によりやく始まったと言える。ヴァリッシュがそのために戦い、処刑された 1934 年 2 月の蜂起を巡っても、「蜂起」、「事件」、「内乱」、「暴動」、「武装蜂起」、「労働運動の敗北」などと様々に記載され、歴史的にもまだ完全に解明されていないように思われる。本稿ではその 1934 年 2 月の蜂起を中心に、ヴァリッシュの生涯を辿り、オーストリア現代史に於ける彼の果たした役割を考察したいと思う。

I. コロマン・ヴァリッシュの生涯³⁾

コロマン・ヴァリッシュは 1889 年 2 月 28 日、現在はルーマニアのルゴジュの町に生まれている。市内の中心に河が流れているが、この河によってハンガリー系、ドイツ系、ルーマニア系の居住区が分かれていた。

ヴァリッシュの父親マティアスは移住したドイツ系の子孫だった。父親は大工職人としてヨーロッパ中を放浪した後、ルゴジュへ戻り、家具職人の仕事を見つけた。その後結婚し、ヴァリッシュは 10 番目の子供として生まれている。ヴァリッシュが 4 歳になったとき、父親はこれまでの職業を断念し、自分の小さな家を飲み屋に改造した。ヴァリッシュの母親は料理上手で、父親もユーモアに溢れ、歌も上手く、店は大いに繁盛した。しかし客のタバコの不始末で店は火事になり、全てが灰となった。火災保険に加入していなかったため、父親は再び大工職

1) Segers, Anna: Der letzte Tag des Koloman Wallisch. Anna Seghers Werke in zehn Bänden. Darmstadt. 1970. Bd.1., S. 109f.

2) 2003 年にスイスで発見された未発表の原稿の中にこの詩がある。筆者はまだ公刊されていない未発行のその詩を「上部オーストリア社会主義青少年」のホームページで見ることができた。ブレヒトには珍しく 280 詩行にも達する長い詩である。

3) コロマン・ヴァリッシュの生涯に関しては主として以下の 2 冊の著書に負うところが多い。
Wallisch, Paula: Ein Held stirbt. Karlsbad, 1935.
Soós, Katalin: Koloman Wallisch. Wien, 1990.

人に戻らざるをえなかった。この火災を契機として父親は宗教に目覚め、ほぼ毎週日曜日に教会へ出かけるようになり、ヴァリッシュもミサの従者を務めたりしている。

すでに子供の頃からヴァリッシュは指導者の片鱗を見せ、どんな遊びでも仲間たちはヴァリッシュの言うことに喜んで従ったという。11歳の時、父親が亡くなり、ヴァリッシュは成績優秀ではあったが、学校に通うのを断念せざるをえず、左官屋に徒弟として住み込んだ。14歳の時にヴァリッシュは堅信礼を受ける。兄フランツの影響で、ヴァリッシュも15歳の時に労働運動と関わるようになり、兄と共に労働者教育組合に出入りするようになった。学校でハンガリー語しか習っていなかったヴァリッシュはここで熱心にドイツ語を勉強した。

ヴァリッシュは左官職人として熱心に働く一方で、組合の催しの常連となった。それどころかやがて彼自身が様々な催しを企画するようになり、兄と共に演劇の夕べや舞踏会などを企画した。こうした活動を通じ、兄弟は地域の労働運動も指導するようになった。

彼らは組合を指導して何度かストライキも行なったので、間もなく資本家たちの憎悪的となった。彼らはブラックリストに載せられ、ルゴジュではもはや仕事に就くことができなくなり、他の土地へ移らざるをえなかった。フランツはウィーンで職を得たが、ヴァリッシュはドレスデンへ赴き、左官や鉦員、さらには陶磁器工場の労働者として働いた。結局彼は再びウィーンに戻り、兄フランツと再会した。しかし二人は再びウィーンを離れ、トリエステで働くと同時に、同地の「自由オーストリア建築労働者組合」に入り、活動することになった。

1910年、ヴァリッシュは軍隊へ招集され、入隊のためセゲドへ向かった。セゲドは人口約12万のハンガリー第二の都市だった。ヴァリッシュは能力を認められ、選抜されて下士官学校に入学した。下士官学校でも彼は間もなく頭角を現わし、他の兵士たちの模範となった。間もなくヴァリッシュは一等兵になり、3年目には伍長で小隊長になった。

1913年、兵役が終了し、ヴァリッシュは再び故郷に戻り、職に就いた。その頃ヴァリッシュはパウラと知り合い、1914年8月5日に結婚式を挙げることになった。しかしながら7月28日、セルビアで戦争が勃発、ヴァリッシュはすぐに招集され、二人の結婚式は延期された。ヴァリッシュは前線には行かずに済み、セゲドの兵営での勤務に就いた。1915年1月3日、二人だけで役所に届ける形で結婚し、ヴァリッシュは兵士として、パウラは看護婦として働いた。妻パウラも社会主義者であり、そのことを職場でも隠すことはなかった。彼女は過酷な労働と酷い待遇に甘んじていた工場の女性労働者にストライキを促す演説を行ない、そのため警察に8日間拘束された。その件では自宅捜索が行なわれ、ヴァリッシュも警察に連行されてしまった。ヴァリッシュは軍事裁判にかけられ、即刻前線送りということになり、1917年8月にロシア戦線に、後にイタリア戦線に送られた。

1918年10月、ハンガリーで「ユウゼンギク革命」と呼ばれる革命が起こり、11月に「ハンガリー・レーテ共和国」が誕生し、戦争は終結した。ベラ・クーンを指導者とするレーテ共

和国政府は労働者・農民・兵士協議会の 3 者からなる政府だった。戦場から帰還したヴァリッシュはセグドの社会民主党で活躍し、党書記長に任命された。

レーテ共和国政府の崩壊後、白色テロが横行し、約 5 千名が殺害され、7 万人が拘束されたという。ヴァリッシュ自身も何度も危険な目に遭っている。ヴァリッシュは妻パウラの安否を求めてセグドを離れ、パウラの両親の住んでいたマリボルへ向かった。10 月、二人は三ヶ月半振りに再会した。マリボルでは戦前から労働運動が活発だった。間もなくヴァリッシュは労働者や党員たちの信頼を得て、1919 年のクリスマス前には当地の党書記長となった。ヴァリッシュが活躍し始めると、すぐに資本家たちの反感を買い、ブルジョア新聞はこぞって彼が当局から追われている「ハンガリーのボルシェヴィキ」だとのキャンペーンを張った。ヴァリッシュ夫妻は仕方なくマリボルの地を離れざるを得なくなり、シュタイアーマルク州のグラーツへ移っていった。そこで幸運なことにヴァリッシュは旧知の同志ハルトマンに出会った。1920 年 1 月、ハルトマンの推薦でヴァリッシュはフルステンフェルトの党書記長を任されることになった。フルステンフェルトはハンガリー国境に近い人口 6 千名程度の町である。この町でもヴァリッシュが精力的に党のために活躍を始めると、又してもヴァリッシュの「ボルシェヴィキ」キャンペーンが開始された。

1920 年秋、ヴァリッシュはムール河畔ブルック市の市長ビヒラーと知り合いになった。彼はヴァリッシュの働き振りにすっかり感激し、党書記長としてブルックに来てもらいたいと申し出た。1921 年 2 月、ヴァリッシュはその申し出に応じてブルックに赴いた。高い山々に囲まれたブルック市の人口は 1 万 2 千人。鉄道の要所で、シュタイアーマルクの労働運動にとっても重要な都市である。ブルックの市内には大きな丸釘製造工場、木材工場、製紙工場、さらに近郊にもかなりの数の企業がいった。ヴァリッシュはフルステンフェルトに於けるのと同様に、党のために日夜全力を注いだ。

1922 年、オーストリアは深刻な財政危機に見舞われ、5 月にはキリスト教社会党のザイペルが連邦首相となる。彼は財政危機を外国債の発行で乗り切ろうとし、社会民主党はそれに強く反対した。1923 年 9 月、グラーツに続いてブルックでも社会民主党の軍事組織共和国防衛同盟が設立された。またこの年の州議会選挙で党は勝利を収め、絶対多数を占めることになった。1924 年、経済危機の中での党大会でヴァリッシュは「老齢年金や寡婦年金」などの法律制定のためにはストライキも辞さない、と戦闘的な発言を行ない、党員たちの喝采を浴びる。1926 年には就労可能な労働者の失業率は 10% にも達し、ヴァリッシュは党の活動の大半を失業対策に費やす。

1927 年 1 月 30 日、ブルゲンラント州シャッテンドルフで無職の傷痍軍人と 8 歳の少年がナチスに繋がる反動的な「前線兵士」によって射殺された。しかしながら 7 月 14 日、犯人たちに対する裁判で無罪が言い渡されたため、労働者は激しい怒りにとらわれ、街頭へと繰り出

した。いわゆる 1927 年 7 月騒乱事件である。7 月 15 日には首都ウィーンで電気が止められ、労働者たちの大規模なデモが始まった。それに対して武装した警察官が発砲し、死者 89 名、負傷者は千名を越える大惨事となった。党の指導もなく、自然発生的なウィーンの大衆デモは 1 日で終わってしまった。

ヴァリッシュはこの日は妻と休暇に出かけていたが、知らせを受けて翌 16 日早朝にブルックに戻った。ブルックの労働者たちもウィーンの労働者に負けず、興奮していた。ヴァリッシュはすぐにゼネストを宣言し、党の主だったメンバーとゼネスト本部を設置した。市内では非常事態を宣言し、午前 9 時にその旨をブルジョア政党や行政機関の長に周知させた。さらに千名近くの共和国防衛同盟が導入された。血気にはやる労働者を抑え、不必要な流血は何としても回避しようとしたヴァリッシュだったが、事態の深刻さに彼はこう宣告せざるをえなかった：

ブルックで労働者の血が流れた瞬間は、ブルジョアの血も流れるだろう⁴⁾。

ウィーンとの連絡が途絶えたまま、様々なデマが飛び交い、さらにプフリマーが率いるシュタイアーマルクの右翼組織である郷土防衛隊 6 千名が共和国防衛同盟の補給路を断つ行動に出ていた。こうした情勢の変化を見て、シュタイアーマルクの社会民主党指導者はプフリマーの要求に従い、スト中止を決定した。またグラーツからヴァリッシュの元へ「降伏」するようにとの指令も届き、ヴァリッシュは非常事態を解除せざるをえなかった。

この事件は、それまでは単なる右翼組織だった郷土防衛隊が社会的基盤を築き、政治的にも発言権を強めていくことになる出発点となった。これ以降ザイペルは郷土防衛隊を庇護し、徹底して反民主主義と労働運動弾圧の政策を導入していくことになる。またこの 1927 年 7 月事件は、社会民主党にとっても大きな転機となった。すなわちこの事件を境に社会民主党は突如守勢に回り、そのために郷土防衛隊を始めとするオーストリア・ファシズムの公然とした進出を許し、オーストリアの民主主義を死滅させてしまうことになったからである。

1929 年 8 月、ザンクトロレンツェンで当地の社会民主党組織の 10 周年記念の式典が行なわれることになっていたが、郷土防衛隊も同地で同じ時間に集会を催すことにした。共和国防衛同盟員はザンクトロレンツェンに武器を持たずに向かったが、郷土防衛隊は武装していた。ヴァリッシュの演説中に郷土防衛隊が集会場に押しかけ、止めようとした共和国防衛同盟と衝突した。この衝突で武器を持たなかった共和国防衛同盟は死者 3 名、重傷 2 名、軽傷 200 名以上の犠牲者を出した。一方の郷土防衛隊側の死者はなく、重傷 30 名、軽傷 20 名だった。

4) Wallisch, a.a.O., S.188.

本来は警備にあたるはずの警察は両者の衝突後によりやくやってきた。この事件では襲撃した郷土防衛隊は誰一人として起訴されず、共和国防衛同盟だけが起訴、処罰された。この年、ファシズムと親しい関係にあったウィーン警察長官ショーバーが連邦首相に選出され、労働者や党は危機感を募らせていく。さらにこの年、オーストリアも経済恐慌に見舞われ、共和国は危機に直面する。こうした状況の中で郷土防衛隊の攻撃はますます激しくなった。郷土防衛隊はヴァリッシュがハンガリーで残虐行為を働いた、との記事を新聞に掲載し、さらにその件でヴァリッシュを裁判所に訴えもしたが、2年後の1931年4月、ヴァリッシュは裁判で勝訴した。

世界恐慌の年である1930年、各地で失業者のデモが多発する。3月にはブルックで社会民主党の国民集会在開催され、政府がそれまで組合や労働者が勝ち取ってきた成果に敵対する形で準備していたいわゆる反テロ法に反対する決議を行ない、ヴァリッシュは党国会議員にあらゆる手段を用いて法案を阻止するよう求めた。しかしながら党指導部は数箇所の変更を行なっただけで法案を通してしまった。8月にブルックでザンクトロレンツェンで倒れた3名の同志の慰霊祭が開かれ、ファシズムと闘う覚悟の労働者や共和国防衛同盟など多数が参加した。9月、郷土防衛隊はショーバー政権を打倒し、キリスト教社会党は郷土防衛隊と手を組み、新政府に郷土防衛隊と親しい閣僚たちが入閣した。11月の国会選挙では社会民主党は41%を獲得。ヴァリッシュもシュタイアーマルク選出の国会議員となった。

1931年、シュタイアーマルク州の郷土防衛隊指導者プフリマーはヴァリッシュが開催する集会を襲撃して、共和国防衛同盟を挑発し、その勢いで一揆にまで持っていかうと画策していた。一度はヴァリッシュの集会を襲撃しようとしたが、その集会がナチスに反対する集会だったため断念している。この時期、郷土防衛隊とナチスはまだ対立していたからである。

9月12日、プフリマーはついにシュタイアーマルクで一揆を敢行し、新政府樹立を目指した。ヴァリッシュは共和国防衛同盟を動員するよう党指導者ドイッチュに連絡を取り、ドイッチュはさらに政府と連絡をとり、政府が即刻一揆を鎮圧するための措置を取るよう求めた。13日、対応の鈍かった政府だったが、グラーツに駐屯していた連邦軍に一揆鎮圧のためシュタイアーマルク州への出動を命じた。しかしながら連邦軍は郷土防衛隊が自主的に撤退するのを待つかのように、ゆっくりと進軍した。結局、連邦軍と郷土防衛隊との直接的な戦闘は生じることなく、プフリマーたち郷土防衛隊指導者はユーゴスラヴィアへ逃亡した。シュタイアーマルク州政府首相リンテンは郷土防衛隊に同情的で、郷土防衛隊の責任も追及せず、処罰することもなかった。また郷土防衛隊からの武器の押収も不十分なものだった。さらに後に裁判にかけられた郷土防衛隊指導者プフリマー自身も無罪となった。

この事件は社会民主党がファシズムを打倒する決定的な機会を逃したことを物語っている。党は郷土防衛隊に対し徹底的に責任を追及し、解散を求めることもせず、手綱を緩めてしまったのである。また経済状況の悪化の下で、党は政府の提案した予算案もあっさりとして認めてしまっ

た。

11 月、ウィーンの党大会でヴァリッシュはブプリマー一揆の報告を行ない、郷土防衛隊に協力した公務員が何ら罰せられることなく勤務についていること、労働者を殺害した郷土防衛隊員が僅か二週間で釈放された事実などを報告し、シュタイアーマルク州の労働者はこうした事態に敢然と挑み、攻撃されれば流血も辞さない決意であることを述べる。

1932 年 1 月の集会でヴァリッシュは、共和国防衛同盟の助けを借りて郷土防衛隊やナチスの意図を潰すことに賛成する発言を行なう。しかしソースが指摘するように、ヴァリッシュがこの時点でファシズムとの闘いに共和国防衛同盟で十分であると考えていたとすれば、彼の判断の誤りであろう⁵⁾。ファシズムと闘うには全ての労働者や民主勢力の統一戦線が必要だったからである。ただヴァリッシュは郷土防衛隊やナチスとの闘いには農民たちを味方につけねばならないことは理解しており、農民集会を開くなど、そのための努力も惜しみなかった。その意味では 2 月 2 日にラミングで行なった農民集会は大きな意味を有していた。ヴァリッシュは党のファシズムに対する闘いを報告し、反動派との闘いに農民も共に立ち上がるよう説得したのだった。4 月 3 日、ハーフェンドルフの社会民主党の大会でヴァリッシュは 4 月 24 日の選挙の重大性を説き、この日をオーストリアの社会民主党の勝利の日にしようと訴えた。そして 4 月 24 日の選挙では、ウィーン社会民主党は 59% もの得票率を得たのだった。

1932 年 5 月、キリスト教社会党のドルフースが連邦首相に就任する。4 月にイタリアのムッソリーニと会談し、支持を取り付けたドルフースは、権威主義的・愛国的・カトリック的な祖国戦線の運動を起こした。つまり郷土防衛隊とキリスト教社会党を結合して、一方でナチスに有効に対抗し、かつオーストリア独特のイデオロギーを作り出そうとしたのだった。しかしながらドルフースはムッソリーニの意向は受けながらも、社会民主党を徹底的に弾圧することはせず、曖昧な態度を取り続けた。

1933 年 1 月からヴァリッシュはグラーツの党書記長を引き受けるよう要請され、秋から引き受けることになる。この頃すでにヴァリッシュは郷土防衛隊とならんでオーストリアの労働者にとってナチスが第二の敵であることを確信していた。3 月 4 日、新たな国会議員選挙の実施を巡るトラブルから 3 名の国会議長・副議長が辞任したのを幸いに、3 月 7 日、ドルフースは議会閉鎖の措置を取った。彼は例え議会へ集まってくる議員たちを暴力を用いて阻止しても、社会民主党は闘わないだろう、と読んでいたし、事実そうだった。こうしてオーストリア第一共和国の議会制民主主義は終焉したのだった。社会民主党は 3 月 10 日にウィーンで集会を開いたが、バウアーは犠牲者が出ることを恐れて、政府と対決することを避ける発言を行なった。3 月 15 日、1500 名の武装した郷土防衛隊がウィーン市内に配置され、党や労働者を威嚇した。

5) Soós, a.a.O., S.133.

社会民主党の古参の党员エレンボーゲンは党幹部に「今こそジェネラルストライキを宣言する時だ」と告げた⁶⁾。しかしパウアーはこの提案を拒否した。エレンボーゲンはそのことがオーストリア労働運動の歴史の中で最も重大な誤りになることを懸念したが、パウアーも後にそのことを率直に認めている：

議会は閉鎖され、独裁体制が確立した。3月15日に議会を再開する試みはドルフースによって暴力的に阻止された。われわれはそれに対して3月15日にゼネストを打って闘うことも可能だった。あの日ほど闘いに勝利できる条件が整っていたことはなかった(。。。)政府の軍事力も1934年2月の時点に比べれば、はるかに脆弱だった。だからあの時であればわれわれはおそらく勝利していただろう。しかしながらわれわれは闘うことにひるんでしまった。われわれはまだ話し合いによる平和的解決が可能だと信じ込んでいた。ドルフースはわれわれに近々の内に、3月の終わりか4月の始めには憲法改正も含んだ改革を行なうことを約束していた。われわれは闘いを避けた。なぜなら流血の惨事を避けたいと思ったからだった。しかしながらそれから11ヵ月後に市民戦争は勃発してしまった。それもわれわれにとって全く不利な条件の下で。(3月15日に闘わなかったのは)誤りだった。われわれの致命的な誤りだった⁷⁾。

クライスキーは当時の状況をこう記している：

私も33年に戦闘を開始することに賛成していた。なぜなら当時われわれは政府に方針を変えさせる力を有していたからだった。もしかすると連立政権を形成したり、民主主義へ戻すことも可能だったかもしれない。労働者はゼネストを行なう力をまだ有していた(。。。)忘れてならないことは、ヒトラーは権力に着いてほんの僅か数日だった、ということである⁸⁾。

またライヒターの見解によれば、オーストリアの労働者には闘う覚悟ができていた：

全オーストリアで、労働者は闘う決意をしていた(。。。)共和国防衛同盟も臨戦態勢で待機していた⁹⁾。

6) Leser, Norbert: Zwischen Reformismus und Bolschewismus. Der Austromarxismus als Theorie und Praxis. Europaverlag Wien-Frankfurt-Zürich 1968, S.473f.

7) Bauer, Otto: Der Aufstand der österreichischen Arbeiter. Seine Ursachen und seine Wirkungen. Nachdruck der Ausgabe Prag 1934. Wien 1974, S.25f.

8) Maimann, Helene (Hrsg.) Die Kälte des Februar. Österreich 1933-1938. Wien 1984, S.19.

9) Leichter, Otto: Glanz und Ende der Ersten Republik. Wie es zum österreichischen Bürgerkrieg kam. Europaverlag Wien-Köln-Stuttgart-Zürich 1964, S.178.

しかしながら社会民主党の指導部は優柔不断で、明確な戦術を示さなかった。国会議員であるヴァリッシュもこの危機の数日間はウィーンにいた。ヴァリッシュは党の公的な指導部とは反対にファシズムに対する断固たる闘いを行なう決意をしていた。妻パウラによれば、ヴァリッシュは政府に支えられたファシズム組織の武装化を目の当たりしていたし、ファシズムが強大になり過ぎてはや撃退することができなくなるのを懸念していた。ブルックでも労働者は闘かう準備を整えていた。隠していた武器を持ち出し、集会所などに集結した。ヴァリッシュの家では約 20 名の武装した共和国防衛同盟員が待機していた。彼らは三日三晩、党中央からの闘争の指令を待っていた。しかし党指導部から届いた指令は武力闘争を行なわないというもので、彼らは落胆した。翌 16 日にはチロルの共和国防衛同盟が解体され、逆に郷土防衛隊が「臨時警察」を務めることになった。3 月 31 日にはついに共和国防衛同盟が解散させられ、武器の差し押さえも開始された。それに抗議する労働者のデモがウィーンや他の都市でも行なわれたが、社会民主党指導部は決定的な反対行動を起こそうとはしなかった。こうした中で 4 月 15 日にウィーンで社会民主党の臨時集会が開かれたが、この時点でも政府との交渉の可能性があるという楽観的観測が支配していた。ヴァリッシュも党首脳に忠誠を示し、軽率に行動主義に向かうことに反対した党指導部の方針を支持した。そうした社会民主党の弱腰の姿勢を見たドルフース政府は 4 月 20 日には、主要な企業内でのストライキの禁止、伝統的なメーデーの禁止を決定した。5 月 1 日、ウィーン市内は軍隊と警察が多数配置され、労働者たちはデモを行なうことができずに歩道を「行ったり来たり」するしかなかったが、それでも多数が逮捕された。ブルックでは社会民主主義者が整列して式典に向かい、集会場の酒場でヴァリッシュは演説を行ない、この日の意義と 1880 年以降の労働者の階級闘争を評価した。5 月 26 日にはオーストリア共産党が禁止され、さらに 6 月 20 日のナチスによるテロを理由にナチスも禁止された。しかしながら共和国防衛同盟の解散もナチスの禁止措置も徹底して行なわれなかったため、両者は非合法に存続し続けることになった。

8 月 18 日、ドルフースは、ムッソリーニと会談し、憲法の職業的「新規定」及び「社会民主主義」に対する厳しい姿勢を表明したが、社会民主党そのものを禁止することはしなかった。さらに彼は 9 月には身分制的国家的新憲法を制定すると発表した。

9 月 17 日、社会民主党の党指導部と自由労働組合の連邦指導部が集まり、危険が迫っている事を考慮し、大衆に警告を発し、状況の深刻さを示す必要性は認め、許容できない「4 つのポイント」を確定し、そうした事態に至った場合には武力をもって闘うことを決定した¹⁰⁾。そのポイントは以下の 4 つである：

10) Soós, a.a.O., S.164.

- 1) 党の解散
- 2) 労働組合の解体
- 3) ウィーン市役所の占拠
- 4) ファシズム憲法の強制

しかしながら党指導部はこの時点でもなおドルフースと連絡を取り、政府との共同路線を模索していたのだった。

議会制度と政党政治を否定したドルフース政府は、その代わりに新たな政治組織「祖国戦線」を5月に設立していた。そこには郷土防衛隊も独立した軍事組織として組み込まれており、政治的、軍事的にドルフース政府を支える組織となっていた。公務員は祖国戦線に強制的に加盟しなければならなくなり、加盟を強制された鉄道労働者たちは激しく抵抗した。9月28日、ブルックでは鉄道労働者が会議を開き、積極的な抵抗を行なうこと、祖国戦線には加わらないことを決定した。しかし社会民主党の指導部はまだ全労働者を動員して闘う決意には至らなかった。それゆえ個々の組織の抵抗は最初から散發的で、たいした効果はなかった。鉄道労働者の大半は祖国戦線に加盟した。彼らは社会民主主義者ではあったが、失業を恐れたからである。

10月14日から16日にウィーンで秘密の党大会が開かれ、「4つのポイント」を批准した。この時期の社会民主党の政治路線を示す資料として挙げられるのが、ドイッチュがカウツキーに宛てた書簡である。そこには党内に見られる3つの路線が示されている。1つは1926年のリンツ綱領に基づき、状況によっては「独裁の手段」も辞さない戦闘的、革命主義的な路線である。2つ目は、ドイッチュに代表される指導部の路線で、あくまでも内戦を回避し、武力の行使をほのめかしながら政府を脅迫することで、政府に妥協を求めていく路線である。3つ目はカウツキーの推奨する一切の暴力放棄主義である。ラビンバッハは、ヴァリッシュは党の統一を優先し、党指導部路線を認めたとしている¹¹⁾。またグリックは、党指導部は再び反対派を宥め、協調政策が継続されることになったが、そのため労働者は忍耐を求められ、一方で政府は時間稼ぎができ、労働者の抵抗力は弱体化した、と主張している¹²⁾。10月23日、副首相ファイは祖国戦線の集会で、公的企業や民間企業から「国家に敵対的」な分子を排除し、「愛国的」な人間と差し替えると発言し、労働者たちは職を失う恐れが出てきた。11月10日、全土に戒厳令が敷かれ、死刑制度が再導入された。11月12日の共和国誕生を祝う社会民主党の催しは政府によって禁止されたが、党はそれに対して何ら決定的な行動は取らなかった。ブルックでは夕刻、数百名の労働者がポタンに赤いカーネーションを刺し、自由の歌をうたいながら行進

11) Rabinbach, Anson: Der Parteitag im Januar 1933. In: Der 12. Februar 1934, S.354.

12) Gulick, Charles H.: Österreich von Habsburg zu Hitler. Wien 1976, S.467

したが、警察が直ちに介入し、労働者は解散を余儀なくされた。

11月15日、ヴァリッシュは予定通り、グラーツの党書記長のポストについた。社会民主党に対する政府の戦術の基本は社会民主党を漸次廃止することだった。内政的な要因に加え、ムッソリーニによるイタリア型独裁を行なうようにとの圧力もあった。ムッソリーニは1月18日に外務次官をウィーンに派遣し、ドルフースに圧力をかけた。こうして社会民主党弾圧の最終計画が実施されることになった。

II. 1934年2月蜂起

それまで社会民主党と徹底的に闘う姿勢は取らず、曖昧な態度を見せていたドルフースもついに最終決定を下さざるをえなくなった。2月9日、ウィーンで各地区の共和国防衛同盟の指導者が逮捕、武器を押収され、労働新聞の配布も禁じられた。さらに二日後の2月11日、ドルフースは14日に社会民主党への最終措置を取ることも決定した。一方の社会民主党指導部も場合によってはゼネストも辞さない、との決定を行っていた。

事件が生じた2月12日時点でのドルフース側の勢力は郷土防衛隊や連邦軍、警察などを合わせると10万弱の勢力を有しており、一方の共和国防衛同盟は3～4万に過ぎず、戦力的にはドルフース側よりもはるかに劣勢だった。

2月12日、リンツの警察が共和国防衛同盟のリンツ支部を捜索しようとして、事件の火ぶたが切られた。リンツの共和国防衛同盟の指導者ベルナシュックは武力を行使しての抵抗姿勢を示し、警察との間で武力衝突が生じた。共和国防衛同盟の攻勢に驚いた警察は連邦軍に援軍を要請し、連邦軍も戦闘に加わった。ドイッチュは、リンツでの戦闘は党指導部の決定を待たずになされたものだとしている¹³⁾。しかし戦闘が開始された以上、党はリンツの仲間を見捨てることはできなかった。党指導部及び組合指導部はゼネスト突入を宣言した。電気関係の労働者が直ちにストライキに入り、市内の電車はストップした。しかしながらゼネストには至らなかった。ストライキの指令が労働組合の一部にしか届かず、郵便、電話、鉄道などの主要な部門は活動し続けたからであり、共和国防衛同盟の非常招集も同様に徹底されなかったからである。彼らは攻撃を受けて初めて、反撃を開始したのだった。指揮を執った党指導部のパウアーは後にこの事件を「オーストリアの労働者の蜂起」と記しているが¹⁴⁾、この闘いは全オーストリアの労働者ないしは共和国防衛同盟のまとまった闘いでは決してなく、戦闘もわずか四つの州で生じたに過ぎなかった。

ウィーンでの主たる戦闘地はオッタクリンガーの労働者ハイムで、13日の早朝に攻撃を受けた。それに対して共和国防衛同盟はマイドリンクの幾つかの地区建物に撤退し、14日の夕

13) Soós, a.a.O., S.178.

14) ebd., S.179.

方までそこに留まった。ジンメリングでは 12 日以降共和国防衛同盟が支配していたが、15 日に最後の戦闘が行なわれた。ザンクトマルクスの中央家畜市場は 13 日の夕方までに政府側に屈した。すでに 12 日に国防軍砲兵隊の砲火を浴びていたデーブリックのカールマルクス・ホーフは 15 日の昼に降伏した。13 日は戦闘の中心地だったドゥロリーツドルフは 14 日に国防軍や郷土防衛隊の大動員をかけられ、共和国防衛同盟はチェコ国境まで追いやられ、亡命する羽目になった。指導者のパウアーとドイッチュもチェコスロヴァキアへ亡命した。後述するブルックでの戦闘も含め、この出来事での死者は社会民主党側で 196 名、政府側で 118 名、さらにヴァリッシュを含めた社会民主党の指導者 10 名が後に処刑された。

Ⅲ. ブルックでの状況とヴァリッシュの逮捕

2 月 12 日、ヴァリッシュは普段通りにグラーツの党書記局へ出勤し、勤務についていた。そこへブルックの同志から緊急の電話が入り、すぐにブルックへ来てもらいたい、との要請を受けた。ヴァリッシュは自宅に戻ると、妻パウラを伴いタクシーでブルックに向かった。車の中でヴァリッシュはパウラにこう語った：

これは組織的な自殺行為だと確信している。政府は今や軍隊や武器、弾薬類を装備して圧倒的に強くなっているのだから(。。。)シュタイアーマルクの労働者が闘うことは分かっている。でも全ての部署で闘う訳ではないことも分かっている。鉄道労働者はゼネストには加わらないだろう。また敗北の後に自分が犠牲者の一人になることも分かっている¹⁵⁾。

ヴァリッシュは何ら幻想を抱いてはいなかった。それどころか自分たちは敗北するだろうとすら予測していた：

たとえわれわれが今日勝利したとしても、やがて敗北することになるだろう。われわれはファシズムに支配された国々に取り囲まれている。われわれが権力を掌握すれば、すぐに外国の軍隊がこの国を占領するか、あるいはわれわれは兵糧攻めにあってしまうだろう。決して長く持ちこたえることはできないだろう¹⁶⁾。

タクシーでブルックへ向かいながらヴァリッシュは途中の幾つかの町で信頼のおける同志たちに状況を伝えていった。昼過ぎにブルックに到着すると、ルースと二人で闘いの指揮を取ることにした。主としてヴァリッシュは政治部門を、ルースは軍事部門を引き受けた。幾つかの

15) Wallisch,a.a.O., S.18.

16) ebd., S.20.

企業でストライキが開始され、共和国防衛同盟はストライキを支援した。共和国防衛同盟は警察と銃撃戦となり、警察の駐屯地を包囲した。この戦闘で共和国防衛同盟指導者のリンハルトは銃撃を受けて死亡。他の隊員一人が重傷を負う。ヴァリッシュは市内の党本部にいたが、市役所に向いて状況を確認し、近郊と連絡が取れていないことが分かるとすぐさま列車を止めるように指示した。午後 8 時半までには列車は止まり、ブルックでのゼネストは完了した。劣勢に立たされていた警察はグラーツの連邦軍に軍事援助を要請した。それを知ったヴァリッシュは共和国防衛同盟を使ってブルック市内へ通じる道路を封鎖させた。しかしながら数でも装備でも上回る連邦軍はブルックに迫ってきた。連邦軍の到着が間近に迫った時点でヴァリッシュはブルックからの撤退を決意し、320 名の共和国防衛同盟や労働者とブルックを後にして、山岳地帯に逃れていった。ヴァリッシュは最終的には、各自の決断で取るべき道を選ばせ、最後まで彼と行動を共にする道を選んだ 100 名近くの仲間と山岳地帯をユーゴスラヴィアへ向けて逃避行を続けることになった。その間に何度か軍と銃撃戦を交わし、仲間は徐々に少なくなっていく。

ルースは早い段階から仲間と離れ、警察にヴァリッシュたちの行き先を密告し、仲間を裏切った。ヴァリッシュたちは当初予定していた方向へは進めないことが分かると、東シュタイアーマルクへ向かい、そこからユーゴスラヴィアへ逃れることにした。

2 月 14 日、警察の射撃隊と郷土防衛隊の一团は逃亡中の数名の共和国防衛同盟員を逮捕し、武装解除させた。ヴァリッシュたちはからくも森の中に逃れた。軍と警察はスキー・パトロール隊を山岳地帯に送り込み、山小屋を中心にヴァリッシュたちの捜索を続けた。ヴァリッシュたちは全員が寒さと食糧不足のために極度に疲労していた。2 月 16 日の軍と警察との戦闘でヴァリッシュの仲間はわずか 12 名となり、さらなる抵抗は絶望的となった。そこでヴァリッシュはグループを解散し、各自がそれぞれ単独行動を取るよう指示した。ヴァリッシュは 2 名の同志と牧草地の干草小屋にしばらく身を隠した。その後彼は妻パウラと再会を果たした。その前後の状況はパウラの回想記に詳細に描かれている。ここでは裁判でのヴァリッシュの発言を再現しておこう：

妻はブルックに留まっていた。私は数日間、山の上にいる。それからオーバーアイヒの方へ降りてきた。干草小屋に隠れていたが、そこで妻が近くにいることを聞かされた。干草小屋から外に出た時、一人の同志から妻の居場所を教えてもらった。それから私は妻と再会した(。。) 私は同志たちが撤退したことを聞かされた。それで私は、ここに留まる義務はないと考えた。また私は、自分に対する逮捕命令が出されたことも知らされた¹⁷⁾。

17) Soós, a.a.O., S.191.

ヴァリッシュの一行が山岳地帯へ逃れた事実が明らかになった日、政府は意図的にデマを流した。政府にとってヴァリッシュは労働者の抵抗運動の象徴だったからである。最初のデマは、ヴァリッシュがブルックでの戦闘で戦死した、というものだった。次にヴァリッシュは仲間の労働者に襲撃され、八つ裂きにされ、彼の頭蓋は警察によって森で発見された、とのデマが流された。しかしながらヴァリッシュの生存を認めざるをえず、政府はヴァリッシュの首に 1000 シリングの報奨金を出した。後に報奨金は 5000 シリングに引き上げられた。300 名の兵士、警察はヴァリッシュを捜索した。結局、裏切りの報奨金を手にしたのは郷土防衛隊員でも警察官でもなく、一人の労働者だった。

ヴァリッシュは 17 日に、車でユーゴスラヴィアへ逃亡しようとしていた。その途中、顔見知りの男にヴァリッシュであることを見抜かれ、警察に密告されてしまう。すぐに警察と郷土防衛隊が非常線を張り、その日の午前中にヴァリッシュは逮捕された。

IV. 即決軍事裁判とヴァリッシュの処刑

2 月 16 日、後の首相シュシュニックは閣議の席で、ヴァリッシュを逮捕した場合には、相応の処罰をするため、逮捕した地で即決軍事裁判にかけるべきであると語った。ヴァリッシュは国会議員として不逮捕特権を有しており、通常の裁判では彼を死刑にすることは不可能だったからである。ヴァリッシュ自身は逮捕された時点で死を覚悟し、同志のために犠牲になろうと考えていた。自らが犠牲になることで、ファシズム政府の残忍性が鎮静され、同志の処刑が免れる、と考えたからだ。2 月 12 日の昼以降、「国家非常事態」宣言が出され、「大逆罪」の容疑で社会民主党の幹部や国会議員たちと共に、数千名の地方幹部たちや一般党员たちが逮捕されていた。さらには個人的に社会民主党とつながりのあった者たちまでも逮捕された。ホルトマンの報告によれば、7823 名が 3 月半ばまでウィーン警察や拘置所に拘束され、9 名に死刑判決が下され、さらに数多くの人々に懲役刑が下されたという¹⁸⁾。ヴァリッシュの引渡しと即決軍事裁判に関して、イギリスの女性作家ミチソンは 1934 年にロンドンで出版された「ウィーン日記」の中で次のように書いている：

彼らはヴァリッシュを車でレオーベンの監獄へ運んできた。彼の妻も一緒だった。60 名の警察と地方警察官が彼を見張っていた(。。)警察はヴァリッシュを縄でしばり、頭には灰色の覆いを被せた。監獄は一杯だった。彼は女性房の 6 号室へ連行された。房は奥行きも幅も 2 メートルほどだった。房には彼一人だけで、他には誰もいなかった。房の扉は開いたままだったが、

18) ebd., S.194.

扉の側には警察官と鉄兜を被った兵士が立っていた¹⁹⁾。

2月19日、ヴァリッシュとルースは刑法73条違反でレオーベンの即決軍事裁判にかけられた。裁判長マリニッチュ、検事ズッパン、弁護士ヴァークナーの下で裁判が開始された。労働者は誰も傍聴を許されなかった。法廷は最初にルース、次にヴァリッシュを尋問した。

ルースは「私の行動を大逆罪と受け取る人もいるかもしれませんが、私はただ流血を避けようと望んだにすぎなかったのです」と自己弁護した。次にヴァリッシュが連れ出された。ヴァリッシュはいつも通りの落ち着いた思慮深い態度で、特に興奮した様子も不安な様子も見られなかった。彼は責任を逃れようとはせず、同志が不利な目に遭わないよう可能な限り、同志の名前を挙げることはなかった。同時にヴァリッシュは勇敢に、かつ激しくドルフース政府と郷土防衛隊を非難した。罪を認めるのか、という裁判長の問いに対してヴァリッシュは、郷土防衛隊指導者シュターレンベルクが有罪ならば、その場合にのみ自分も有罪である、と応えた。「ストライキが多少は激しく進んだ、とは思いませんか？」という裁判長の問いに対しては「その通りです。でも私にはどうすることもできませんでした」と答えた。さらに彼は、労働者たちは郷土防衛隊によるクーデターを覚悟していたのだ、と付け加えた。裁判長がヴァリッシュに「憲法に則った権利を護るために、党は防御のために武装せざるをえなかった、とあなたは思っているのですか」と尋ねると、「そうです、そう思っています。そういう状況だったのです」とヴァリッシュは答えた。

蜂起に関しては、ヴァリッシュは以下のように語っている：

国会閉鎖以降は立法権と執行権は一人の人物の手中にありました。憲法裁判所は廃止され、労働者の選挙権は剥奪され、失業保険は引き下げられ、支給期間は105週間から53週間へと短縮されました(。。。)集会の自由は認められず(。。。)党は常に平和的に行動しましたが、チロル州で郷土防衛隊の挑発が続きました。党の解体、禁止の危険性がますます近づいたのです。労働者たちはそうした状況の中で蜂起を強いられたのです。彼らは憲法を護り、自分たちの権利を擁護しようとしたのです(。。。)私が有罪判決を受けざるを得ないことはよく分かっていますが、恩赦の申請はしません。恩赦など必要ありません(。。。)私は1905年以来の社会民主党員です。私は社会民主主義者以外であったことは一度もありません。私は労働者のために全生涯を捧げてきました(。。。)私が労働者のために誠実に戦い、しかも彼らと共に成功を収めたので、敵の憎悪の念は非常に強かったのです。人はいかなる行為も覚悟しなければなりません、自己を犠牲にする、という覚悟もしなければならぬのです²⁰⁾。

19) Geschichte der Kommunistischen Partei Österreichs 1918-1955. Kurzer Abriß. Wien 1977, S.151.

20) Soós, a.a.O., S.199.

証人たちの尋問後に法廷は審議に入った。検事ズッパンは有罪宣告および死刑の最終動議を出した。

弁護人たちは、この件を正規の裁判にかけるように、またルースには死刑を科さないようにとの提案を行なった。ある傍聴者によってメモされ、非合法に撒かれたピラではヴァリッシュの発言が以下のように記されている：

ここに社会主義者として立っていることを誇りに思っており、社会主義の実現を目指す闘いに自分の命が捧げられたのだと言えることを誇らしく思っている(。。。)私はたとえ今日死なねばならぬとしても、撒かれた種がいつかは果実をつけ、新たな闘いを生み出すことに満足している²¹⁾。

午後 8 時 40 分、裁判長は死刑判決を言い渡した。ヴァリッシュは恩赦申請を拒否し、その代わりに妻に会い、日刊紙を読みたいと頼んだ。審理は 8 時 45 分に終了し、23 時 40 分に死刑が執行されることになった。弁護士は恩赦申請を行なったが、ヴァリッシュの申請は却下され、ルースは様々な事情が考慮され、終身刑となった。

ヴァリッシュの最後の数時間に関してはミチソンの日記およびリンハルトの思い出などで知ることができるが²²⁾、特にヴァリッシュと同じ房に入れられていた妻パウラは、最後まで労働者のために闘ったヴァリッシュの姿を感動的に伝えている：

「ヴァリッシュ夫人、出てください！」と呼ばれた私はよろめきながらドアから出て、第 6 房へ連れていかれた。そしてその狭い独房の真ん中に夫が立っている姿が見えた。椅子には私の弟が座って泣いていた。一瞬、私は息が詰まった。そしてひらめいた：「別れなのだ！」。私は意識を失ってしまったかのように立ちつくした。それから私は弟に向かって叫んだ。「ゲオルク、本当じゃないと言って頂戴！言って！言って！」。彼は泣きながらうめく様に言った。「残念ながら、本当なのだ！」コロマンは私を腕に抱き、穏やかな声で宥めながら私に話し掛けた。「落ち着け！落ち着くのだ！君はいつだって勇敢な女性だった。私はいつでも君のことを誇りに思っていた。君は私と共に多くの辛酸をなめてきた。しかし君は蜂起した男の妻であり、再度勇敢でなければならない。それとも私がへなへたと負けてしまうべきなのかい？あの悪党たちが私に勝つ方がいいのかい？そうなのかい？」と彼は迫るように尋ね、私の身体を自分の方へ引き寄せた。「違うわ！」と私は答えた。そして気を強く持とうと努めた。「いいかい、」と

21) ebd., S.201.

22) ebd., S.204f.

コロマンは言った。「私だってまだ生きていたいし、自分の中に行動したい衝動を感じている。私はまだ闘いたいのだが、死なねばならないのだ。君が私の名前を継ぐのだ、闘いのサーベルを君に引き渡す。プロレタリアート解放のために闘い続けるのだ！」

コロマンはそれから自分の裁判のことを報告した(。。。)また自分の姉や私の両親に別れの手紙を書いたことを話してくれた。彼の弁護士はウィーンに恩赦を求めて電報を打ったが、自分はドルフスやシュシュニク、シュターレンベルク、ファイなどから恩赦を受けるつもりはない、と語った。彼らもいつかは死んでしまう、そして誰も彼らのことを思い出すことはないだろう。でもその時でもわれわれの理念は生きているだろう(。。。)コロマンは最後にさらにこう言った。「私は(。。。)非常に君に感謝している。しかし特に感謝しているのは、君が(逃亡中の)藁小屋のなかで私が自殺するのを止めてくれたことだ。だから私は連中の耳に、連中には不愉快な多くのことを、まだ叫ぶことができたのだ。そして私はプロレタリアートのために最後の犠牲者として、プロレタリアートのための殉教者として死ぬところまでこぎつけたのだ。君への最後のお願いだ。われわれは結婚以来ずっとお互いを愛してきた。われわれはお互いに非常に幸せだった。最後の願いをかなえておくれ。どうか気持ちを強く持って、君との別れを辛いものにしないでおくれ！」。

私は放心状態で彼を見詰めた(。。。)コロマンはグラスに4分の3の水と、4分の1のワインを注ぎ、飲み干した。それから再び彼は私の方を向いた。私は彼の顔に、首に、両手に何度もキスをした。それから彼も私にキスをした、もう一度両手に私を抱きしめ、ゆっくりとドアから私を外へ押し出した²³⁾。

ヴァリッシュの遺体は処刑後直ちにレオーベンの中央墓地へ埋葬され、墓はすぐに壊された。そのため彼がどこに埋葬されたのか誰にも分からないということだった。しかし労働者たちは手分けしてヴァリッシュがどこに葬られたのかを突き止めた。ヴァリッシュが埋葬された墓に綺麗な花が手向けられた。警察はすぐに花を撤去したが、すぐさま新たな花が手向けられた。業を煮やした警察は遺体を処分し、墓を撤去するためにヴァリッシュの妻パウラに遺体焼却を同意させようとしたが、パウラは拒否した。かくしてヴァリッシュの墓には常に花が手向けられたのだった。時には墓に追悼の詩や文章が置かれていることもあった。

君がわれわれにとっていかなる存在だったのか、
そのことをわれわれはしっかりと見極めたいと思う。
われわれは決して忘れることはないだろう、

23) Wallisch, a.a.O., S.242f.

君がわれわれのために死んだことを！²⁴⁾

ベルギーの首相からドルフス宛てにヴァリッシュの恩赦を求める電報が届いた。しかしながら電報が届いた時には、ヴァリッシュはすでに処刑された後だった。

V. おわりに

1934年2月のブルックでの蜂起を中心にコロマン・ヴァリッシュの生涯をたどってきた。妻パウラも書いているように、ヴァリッシュは「勝利を信じた革命指導者」としてブルックへ赴いたのではなく、必要とされる時には必ず戻ってくる、との労働者との約束を果たすために、自らもほとんど勝利を期待することのない闘いへ、死を覚悟して戻ってきたのだった。1934年2月蜂起を巡っては、先に述べたように今日でも議論は分かれている観がある。オーストリアでは蜂起から30周年を迎えた1964年頃から徐々に歴史的、政治的論及や学問的研究が開始されたが、それまではこのテーマはタブーだった感がある。40周年を迎えた1974年にはレーザーが「1934年2月12日に対する12のテーゼ」で社会民主党執行部の方針を非難し、2月事件は党指導部の誤った戦術、および不幸な軍事政策の結果だとしている²⁵⁾。またペーベルは「この市民戦争は軍事的に勝利するものではなかった。なぜなら十分に組織された炎ではなく、単に地方の、自発的に燃え上がった炎だったからである」と、十分な組織的準備もなく、一揆的に発生したものだとしている²⁶⁾。50周年の1984年には記念の小冊子が出版され、ヴァリッシュの妻パウラが「半世紀経った後でも自由と民主主義のために倒れたコロマンや他の全ての犠牲者が今日でもなお労働運動の中で忘れられずにいる」ことを感謝した一文を寄せている²⁷⁾。また同年にはオーストリアを代表する歴史家たちの論文集『オーストリア・ファシズム』が出版され、オーストリア・ファシズムとの関連から1934年2月蜂起にも触れられている²⁸⁾。

1990年にはゾースが豊富な資料を基に「コロマン・ヴァリッシュ——政治的伝記」を書き、ヴァリッシュの実像に迫り、彼と1934年2月蜂起が有する歴史的、政治的な意義を明らかにしている²⁹⁾。

2003年11月にはオーストリア社会民主党の国会議員会館の入り口にヴァリッシュの記念

24) ebd., S.240.

25) Leser, Norbert: 12 Thesen zum Februar 1934, in: Internationale Arbeiterbewegung (X.Linzer Kongreß 1977). Europaverlag Wien, S. 321f.

26) Soós, a.a.O., S.212.

27) Koloman Wallisch. 50 Jahre „12. Februar 1934“, Bruck/Mur 1984, s. 6.

28) E. タロシュ, W. ノイゲバウアー編: 『オーストリア・ファシズム』(田中浩・村松恵二訳) 未来社 1996年

29) Soós, Katalin: Koloman Wallisch, Wien 1990.

額が飾られた。また 2008 年 8 月にはブルックとレオーベンでヴァリッシュ追悼の式典が行なわれ、ヴァリッシュに死刑判決を下した即決軍事裁判を基にしたコラージュ演劇がレオーベンの州裁判所陪審員法廷で初演され、話題になっている。

1934 年 2 月蜂起からすでに 70 年以上が経過したが、「労働者のために全生涯」を捧げ、オーストリアの民主主義を守るために闘かい、そのために命を捧げたコロマン・ヴァリッシュはオーストリアの労働者、民主主義を守る人々の間にいつまでも風化することなく生き続けることであろう。